Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語におけるオノマトペの音韻形態と音象徴性に関する研究
Author(s)	能登, 邦之
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49486
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【２】

氏　　名	能（の）　登（と）　邦（くに）　之（ゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３０３７　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**日本語におけるオノマトペの音韻形態と音象徴性に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　渡部眞一郎 （副査） 教　授　杉本　孝司　　准教授　難波　康治

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，日本語オノマトペの音韻形態の振る舞いや機能を明らかにし，オノマトペをオノマトペたらしめているといえる音象徴性の働きについて考察した。オノマトペを特徴付けている反復型と接辞型の形態や意味について吟味し，一般語彙との相違を明らかにすることも目的とした。

１章では，オノマトペの諸相をみながら，本論文で扱おうとしているオノマトペとはどういうものかを示した。従来枝分かれ式に分類が試みられていたオノマトペを，ここではより簡易にまとめるため，擬音語と擬態語がそれぞれ下位分類を内包しているという形を提案した。

２章では，オノマトペの代表格である反復型のオノマトペについてその形態と意味を考察した。語基に対しては，反復も一種の接辞としての機能があることを確認し，オノマトペにおける反復表現の独自性を明らかにした。語彙としての確立という観点から考えたとき，反復という操作が極めて有効であり好まれていることがわかった。

３章では，まず接辞型の形態とその意味について先行研究を検討しながら再解釈を試みた。特に「り」には今までのような積極的な意味や，文語的な響きという解釈は妥当ではなく，様態的あるいはより語彙的(引用性が乏しい)であることを主張した。次にオノマトペの接辞型について，接辞には音声配列上の制約や，意味的な性格上の制約により，連結には順序があることを明らかにした。また，強調形における接辞の生起が，日本語の音韻制約によって，決められていることがわかった。これは，今まで強調の挿入辞としては見なされていなかった語中の撥音も，促音と同様に強調化を実現させるためのものであるという主張を支持するものである。

また接辞の内，語末の促音の存在について，引用性を明示する役割があることを示し，他の接辞とは性格が大きく異なる可能性を考察した。音声学的な実在性を求めて簡単な実験を行い，促音の存在を音響学的に示すことができた。後続に閉鎖子音を伴わない語末の促音は，直前の母音の発音時間によって実現されている可能性があることを明らかにした。そして語中の促音がオノマトペに独自的でないのと同様に，語末の促音も必ずしもオノマトペに限った現象とは言えないことを示した。

４章ではオノマトペの実際の使用について古典作品や近現代の文学作品を調べた。文章中に用いられるオノマトペは形態も種類も非常に単調であり，実際には慣習化された一部のオノマトペだけが繰り返し用いられていることがうかがえた。古典和歌では，明らかにオノマトペという語彙層が避けられていることが確認できた。箏曲の唱歌は楽器音の言語音化という観点から，非常に有用な資料であることを提言し，

その音象徴性の音声学的合理性を見出すことができた。日本語はオノマトペが豊富であるなどと言われているが、擬音語に関しては限界があり正確には擬態語が豊富である。実用例やデータの収集からもそうした点が確認できた。

５章では，引用構造を必要とするオノマトペから一般語彙に至るオノマトペを観察し，オノマトペとオノマトペとはいえないものが連続的であることを確認した。典型的なオノマトペと，臨時形オノマトペと，一般語彙的扱いを受けているオノマトペとの３つの階層に対し，引用性と形態的特徴という二つの尺度を用いて，それぞれの位置づけを試みた。引用性はそのオノマトペがどれだけ一般語彙化しているかということを表すものでもあり，形態的特徴はオノマトペがバリエーションを持っているかどうかに関わっている。

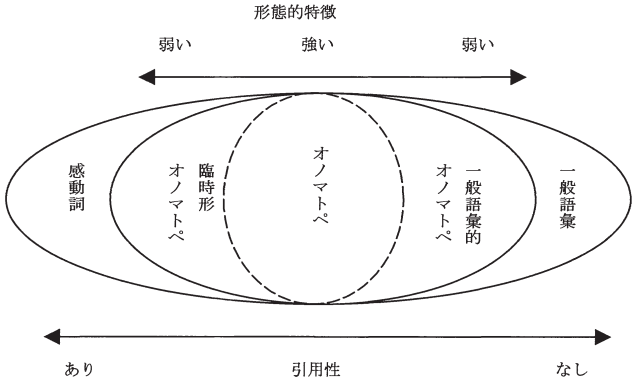

図１．引用性と形態による日本語語彙層のレベル分け

最後に，６章においてオノマトペが子音や母音を交替させて音象徴性を利用しながら生産されている実態を明らかにした。オノマトペとその周辺の語彙が連続てきであったように，オノマトペにおける音象徴性も非常に密接に絡み合っていることがわかった。子音を交替させることによって，微妙なニュアンスの違いを生み，母音の交替は主に描写内容を変更させる力があることがわかった。

全体を通して，オノマトペをオノマトペたらしめている音韻形態と音象徴性の存在が，どのような制約あるいは規則を持って現れるのかを明らかにした。そしてオノマトペとその周辺に位置する臨時形オノマトペや，一般語彙的オノマトペ，さらに感動詞や一般語彙といえるものを連続的にとらえつつそれぞれを区分した。

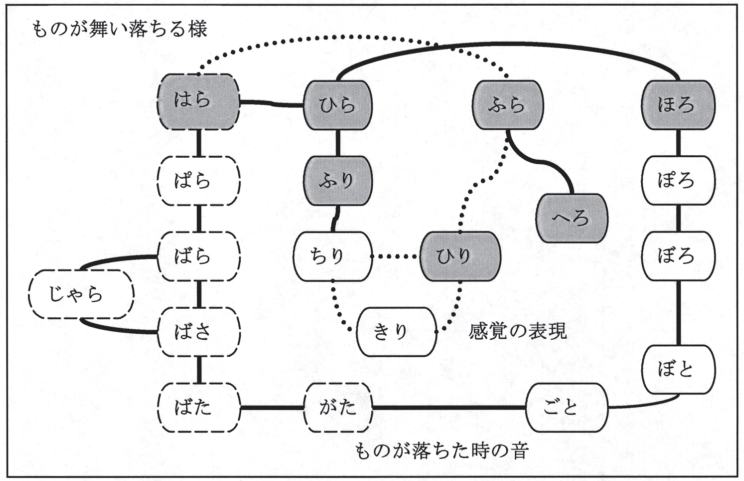

図２．子音・母音の交替によりバリエーションを増やすオノマトペ

オノマトペは日本語学習者にとって，しばしば困難なものとされる。日本語に限定されない音象徴性の研究が，日本語のオノマトペの解釈にも役立つかも知れない。世界の諸言語におけるオノマトペの対照研究が，有意義な発見をもたらすと思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語のオノマトペ（擬音語、擬態語等）について、オノマトペに真に特有な音韻、形態、その他の特徴が何かということを中心課題として考察している。

第１章では、日本語の語彙を形成する和語・漢語・外来語という語種のうち、オノマトペは和語の語種に含まれると一般にされているが、オノマトペは和語とは非常に異なる音韻的、形態的特徴や制約をもっており、それらの特徴や制約は日本語の他の語彙には見られないオノマトペ特有のものであることを詳細に例証し、オノマトペの語種としての独自性について考察している。

第２章では、従来オノマトペ特有とされてきた音韻的、形態的特徴の一部が基本的には一般語彙にも見られるものであることを示したうえで、厳密にオノマトペ特有と言える音韻、形態の特徴が何かという問題を反復型のオノマトペの例に基づいて考察している。

第３章では、１モーラ、あるいは２モーラのオノマトペに接辞と本論文が呼ぶ撥音（Q）や促音（N）が付いた形、母音が長音化（R）した形、「り」という語尾が付いた形、これら４種類の派生形の意味や役割について考察している。これらの接辞の振る舞いがいかにオノマトペを特徴的なものとしているかを例証している。

第４章では、オノマトペが実際にどのように用いられているのか、文学作品や短歌などからその使用例を考察している。また、箏曲唱歌を通して楽器音とオノマトペがどう関連するかを考察している。

第５章においては、漫画等に観察される臨時的なオノマトペや感動詞など、オノマトペとオノマトペでないものとの境界について探り、オノマトペの語彙性についても考察し、一般語彙と比較してオノマトペがどのような

点において特異なのかについて明確にすることを試みている。

第６章では、オノマトペの基本的な形態である二音節語基を対象に、その子音と母音の出現の分布を詳細に調べ、オノマトペにおける母音と子音の音象徴性について論じている。

本論文は、多くの先行研究を踏まえたうえで、日本語のオノマトペを多角的に論じて、独自のオノマトペ論を展開している点で高く評価できる。本論文の分析は認知言語学等の特定の理論的枠組のもとでなされたものではないが、その成果は理論的貢献にもつながるものとして評価できる。

以上により、本論文を博士号（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。